

[B年] 受難節第5主日(2026年3月22日)**【旧約聖書日課】哀歌 3章 (1~9節) 18~33節**

¹ わたしは
主の怒りの杖に打たれて苦しみを知った者。
² 闇の中に追い立てられ、老なく歩く。
³ そのわたしを、御手がさまざまに責め続ける。

⁴ わたしの皮膚を打ち、肉を打ち
骨をことごとく砕く。
⁵ 陣を敷き、包圍して
わたしを疲労と欠乏に陥れ
⁶ 大昔の死者らと共に
わたしを闇の奥に住まわせる。

⁷ 柵を巡らして逃げ道をふさぎ
重い鎖でわたしを縛りつける。
⁸ 助けを求めて叫びをあげても
わたしの訴えはだれにも届かない。
⁹ 切り石を積んで行く手をふさぎ
道を曲げてわたしを迷わす。

¹⁸ わたしは言う
「わたしの生きる力は絶えた
ただ主を待ち望もう」と。

¹⁹ 苦汁と欠乏の中で
貧しくさすらったときのことを
²⁰ 決して忘れず、覚えているからこそ
わたしの魂は沈み込んでいても
²¹ 再び心を励まし、なお待ち望む。

²² 主の慈しみは決して絶えない。
主の憐れみは決して尽きない。
²³ それは朝ごとに新たになる。
「あなたの真実はそのほど深い。
²⁴ 主こそわたしの受ける分」とわたしの魂は言い
わたしは主を待ち望む。

²⁵ 主に望みをおき尋ね求める魂に
主は幸いをお与えになる。
²⁶ 主の救いを黙して待てば、幸いを得る。
²⁷ 若いときに軛を負った人は、幸いを得る。
²⁸ 軛を負わされたなら
黙して、独り座っているがよい。
²⁹ 塵に口をつけよ、望みが見いだせるかもしれない。
³⁰ 打つ者に頬を向けよ
十分に懲らしめを味わえ。

³¹ 主は、決して
あなたをいつまでも捨て置かれはしない。
³² 主の慈しみは深く
懲らしめても、また憐れんでくださる。
³³ 人の子らを苦しめ悩ますことがあっても
それが御心なのではない。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 5章1~11節

1.このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって、神との間に平和を得ており、2.このキリストのお陰で、

今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。³そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、⁴忍耐は練達を、練達は希望を生むということ。希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。⁶実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。⁷正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれませんが。⁸しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。⁹それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。¹⁰敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。¹¹それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。

【福音書日課】マルコによる福音書 10章32~45節

³²一行がエルサレムへ上って行く途中、イエスは先頭に立って進んで行かれた。それを見て、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた。イエスは再び十二人を呼び寄せて、自分の身に起ころうとしていることを話し始められた。³³「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。³⁴異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する。」

³⁵ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。「先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが。」³⁶イエスが、「何をしてほしいのか」と言われると、³⁷二人は言った。「栄光をお受けになる時、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」³⁸イエスは言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっているか。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか。」³⁹彼らが、「できます」と言うと、イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる。⁴⁰しかし、わたしの右や左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、定められた人々に許されるのだ。」⁴¹ほかの十人の者はこれ聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立て始めた。⁴²そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。⁴³しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、⁴⁴いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。⁴⁵人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

哀歌 3章(1~9節) 18~33節

- 1 私は主の怒りの杖で苦しみを受けた者。
 2 主は私を駆り立て
 光ではなく闇の中を歩かせた。
 3 そして、一日中幾度となく
 御手で私を責められた。
- 4 私の肉と皮膚を衰えさせ
 骨を砕かれた。
 5 私を取り囲み
 苦難と辛苦で包んだ。
 6 はるか昔の死者のように
 私を暗闇に住まわせた。
- 7 私が逃げられないように
 主は周囲に石垣を築き
 青銅の枷を重くされた。
 8 たとえ私が助けを求めて叫んでも
 主は私の祈りを聞き入れない。
 9 私の行く手に切り石で壁を築き
 通り道を曲げられた。
- 18 私は言った
 「私の栄光は消えうせた
 主から受けた希望もまた。」
- 19 私の苦難と放蕩を
 苦よもぎと毒草を思い起こしてください。
 20 思い出す度に私の魂は沈む。
 21 しかし、そのことを心に思い返そう。
 それゆえ、私は待ち望む。
- 22 主の慈しみは絶えることがない。
 その憐れみは尽きることがない。
 23 それは朝ごとに新しい。
 あなたの真実は尽きることがない。
 24 「主こそ私の受ける分」と私の魂は言い
 それゆえ、私は主を待ち望む。
- 25 主は、ご自分に望みを置く者に
 ご自分を探し求める魂に恵み深い。
 26 主の救いを黙して待ち望む者に恵み深く
 27 若い時に軛を負う者に恵み深い。
- 28 主に軛を負わされたなら
 黙って独り座るがよい。
 29 塵に口をつけよ。
 そうすれば希望があるかもしれない。
 30 自分を打つ者に頬を差し出し
 そしりを十分に受けよ。
- 31 主は、とこしえに拒まれることはない。
 32 たとえ苦しみを与えても
 豊かな慈しみによって憐れんでくださる。
 33 人の子らを辱め、苦しめるのは
 御心ではないのだから。

ローマの信徒への手紙 5章1~11節

1このように、私たちは信仰によって義とされたのだから、私たちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ています。2このキリストのお陰で、今の恵

みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。3そればかりでなく、苦難をも誇りとしています。苦難が忍耐を生み、4忍耐が品格〔直訳→保証、別訳→練達〕を、品格が希望を生むことを知っているからです。5この希望が失望に終わることはありません。私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。6キリストは、私たちがまだ弱かった頃、定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。7正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のためなら、死ぬ者もいるかもしれません。8しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対する愛を示されました。9それで今や、私たちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。10敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。11それだけでなく、私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を誇りとしています。このキリストを通して、今や和解させていただいたからです。

マルコによる福音書 10章32~45節

32さて、一行はエルサレムへ上る途上にあった。イエスが先頭に立って行かれるので、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた。イエスは再び十二人を呼び寄せて、自分の身に起ころうとしていることを話し始められた。33「今、私たちはエルサレムへ上って行く。人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して、異邦人に引き渡す。34異邦人は人の子を嘲り、唾をかけ、鞭打ち、殺す。そして、人の子は三日後に復活する。」

35ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。「先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが。」36イエスが、「何をしてほしいのか」と言われると、37二人は言った。「栄光をお受けになる時、私どもの一人を先生の右に、一人を左に座らせてください。」38イエスは言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。この私が飲む杯を飲み、この私が受ける洗礼を受けることができるか。」39彼らが、「できます」と言うと、イエスは言われた。「確かに、あなたがたは、私が飲む杯を飲み、私が受ける洗礼を受けることになる。40しかし、私の右や左に座ることは、私の決めることではない。定められた人々に許されるのだ。」41ほかの十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立て始めた。42そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、諸民族の支配者と見なされている人々がその上に君臨し、また、偉い人々が権力を振るっている。43しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、44あなたがたの中で、頭になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。45人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・3月22日「受難節第5主日」の日課主題は「十字架の勝利」。

・旧約日課は、「哀歌」から、「第三の歌」の一部。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、信仰によって義とされた者の精神のあり方を説く箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、三度目の受難予告と二人の弟子の願いに応じて従う者の姿勢を説かれた出来事を伝える箇所。

旧約日課(哀歌3章より)

・「哀歌」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分で「諸書」に含まれる詩歌文書。アシュケナジ(ドイツ)系ユダヤ教で用いられる区分で「五つの巻物(ハメシユ・メギロト)」として取り扱われる文書群(「雅歌」「ルツ記」「哀歌」「コヘレトの言葉」「エステル記」)の一つで、ユダヤ教の神殿崩壊を記念する祭日「ティシュ・ベアブ」(アブの月9日)に朗読される習慣となっている。この記念の祭日(アブの月9日)は、「ミシュナ」(ラビたちによる口伝律法)によると、①モーセが派遣したカナン偵察隊の報告を受けてイスラエルが入境を拒否した日付、②前587年ごろバビロニア軍によってエルサレムが陥落し神殿が破壊された日付、③後70年にローマ軍によってエルサレムが破壊された日付、④後133年に皇帝ハドリアヌスの命令により廃墟となっていたエルサレムが更地にされた日付、⑤後135年にバル・コクバの乱が鎮圧・終結させられた日付、とされている。本書の内容は、前587年頃のバビロニア軍によるエルサレム陥落・神殿破壊と荒廃を嘆く歌として解されるが、歴代誌下35:25「エレミヤはヨシヤを悼んで哀歌を作った…」の記述に基づいてヨシヤ王の死をエレミヤが嘆いた歌と解されてきた歴史もある。

・「哀歌」は、5つの歌で構成されており、「第五の歌」を除いて各歌が「アルファベット詩」として詠まれている。その内、日課箇所を含む「第三の歌」は、各アルファベットが三度繰り返される三節(三行詩)を単位として詠まれていることが特徴。ヘブライ語のアルファベットは22文字あり、「第一の歌」、「第二の歌」および「第四の歌」は22節が割り振られているが、「第三の歌」は66節が割り振られている。

・「哀歌」全体は、エルサレムの陥落・破壊および荒廃の現実を直視するところから始めて、エルサレムを擬人化した嘆きの歌が続き、最終的には共同体の嘆きの歌へと展開する構造をもち、典礼的性格が強い。この構成の中で、日課箇所の「第三の歌」は個人の嘆きや悔い改めを歌う内容に特徴があるとされる。

・「第三の歌」に限らず、一連の歌は「主の裁き」に対する「嘆き」とどまらず、「悔い改め」、さらに「主の救い」に対する「希望」が歌われる。

・日課箇所中、22～27節などは、葬儀に際して朗読される伝統がある。

使徒書日課(ローマ5章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。パウロが未訪のローマ教会共同体に宛てて、同地訪問計画をあらかじめ伝え、またその後には計画しているエスパニア伝道への協力を求めて記した書簡としてまとめられている。パウロは、コリント伝道(使徒言行録18章参照)を通じて、ローマ教会共同体メンバーであったユダヤ人夫妻アキラとプリスキラを介して同教会メンバーらと関わるようになっていたが、以前にバルナバ宣教団を離脱して独自の宣教団を組織して活動していたことなどから、ローマ訪問にあたって自身の福音理解を整理して説明し、協力関係を結ぶる根拠を示す必要があると考えていたと推認される。特に、以前著した「ガラテヤの信徒への手紙」で展開していた福音理解はその主張展開に粗雑さや原理主義的な傾向があり、これを修正した丁寧な福音理解の提示をすることが本書の主要部分の展開になったと考えられる。

・日課箇所では、「信仰によって義とされた」(1節)者としてのあるべき考え方や姿勢が説かれている。特に、「キリストの血」(9節)や「御子の死」(10節)の出来事を「和解」の根拠とした上で、同時にこれらの出来事を敷衍して信仰者の「苦難」が「希望」の根拠になりうるという主張を展開している。

・この箇所に至る前に、3～4章ですでに「信仰による義」という福音理解が展開され、殊に「創世記」に描かれる「アブラハム」の物語(出来事)が予型的理解の典拠として述べられている。パウロは、「ガラテヤの信徒への手紙」でも「アブラハム」を取り上げて自身の「信仰による義」の理解を展開しているが、「ローマの信徒への手紙」では、「ガラテヤ書」の予型的解釈を修正したり、異なる説話を典拠にしたりしており、両書簡を統合してパウロの福音理解を読み取ることに無理がある。

・1節/9節「義とされた」のギリシア語は「ディカイオオー」で、名詞形「ディカイオシュネー」と共にパウロが神学的な議論を展開する際に用いる主要な用語。本書簡では14例見られるが、2:13で最初に用いられたのに続き、3～8章に集中して用いられている。他方で「信仰(ピスティス)」(1節、2節)は、本書簡中で40例見られ、1章から16章まで満遍なく用いられている。このことから、「信仰によって義とされる」という主張の主眼点は、「信仰」ではなく「義とされる」にあるということが分かる。「信仰(ピスティス)」は、「(神の)誠実」(3:3)と訳されたり、「イエス」と結びつけて用いられたりすることも多く(3:22,25,26,28など)、必ずしも人間の「信仰心」や「信じる姿勢」を指して用いられているとは限らないが、『聖書』翻訳上は伝統的な解釈としてほとんどの場合に人間の「信仰」を意味するものとして訳されている。他方で、「義」については、人間による「義」の可能性を否定し、神の「義」を絶対視するという視座に揺らぎはない。

福音書日課(マルコ 10 章より)

・日課箇所は、「イエスの三度目の受難予告」とそれに続いて置かれた「ヤコブとヨハネの願いをめぐる対話」の説話箇所。「三度目の受難予告」は「共観福音書」(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えているが、「対話」は「マタイ」のみが同じ文脈で並行して伝えている。ただし、「ルカ」は別の文脈の中で、この「対話」の後半部分に類似する教えを主イエスの言葉として伝えている(マルコ 10:42~45//ルカ 22:25~27)。

・「三度目の受難予告」に関連して、「マルコ」と「ルカ」は弟子たちが驚き戸惑っている様子を描いているが、「マタイ」はそれを省いている。「マタイ」は、主イエスの「受難の出来事」の意味をすでに理解している者として弟子たちの姿を描くことによって、すでにキリスト者として生き始めている者たちにとって主イエスの出来事や言行がどのような意味を持つのかということに関心を向けさせようとしていると考えられる。他方で、「マルコ」や「ルカ」は、読者を繰り返し主イエスの出来事や言行に触れさせることによって、徐々に理解を深めさせようとする意図しているのかもしれない。

・「願いをめぐる対話」は、「マタイ」と「マルコ」が大きな相違なく伝えているが、特徴的な相違点も見られる。まず場面設定として、「マルコ」が「ヤコブとヨハネ」本人たちの願い出としているのに対して、「マタイ」はこれを彼らの「母」の願いとしている。「マタイ」は、彼らの名誉を棄損させないために、この(不名誉な)願い出を「母」によるものとしたのかもしれない。

・この「願い出」に対する主イエスの応答の言葉(38 節、39 節)に、「マルコ」は、「わたしが受ける洗礼を受ける」という句を置いているのに対して、「マタイ」はこれを省いている。「マタイ」は、全章を通して主イエスをご自分の受ける「洗礼」について言及したことを伝えていない。「ルカ」は、これを異なる文脈で伝えているが(ルカ 12:50)、それと結びつけて弟子たちも同じ「洗礼」を受けると言及は伝えていない(ただし、「ルカ」の続巻である「使徒言行録」は、弟子たちの教会における「洗礼」の実践を当然のこととして伝えている)。「マルコ」は、主イエスの「洗礼者ヨハネから受けた洗礼」を主イエスの「受難」と結びつけたうえで、主イエスと同様の「受難」を引き受けることとして弟子たちの受ける「洗礼」を位置づけている。もっとも「受難」の中身は、ここで提示されるような「仕える者となる」ことであり、必ずしも殉教を意味しない。

来週の誕生日 (3月22日~28日)

主日礼拝の讚美歌から

・21-289「みどりもふかき」(= I 122)は、19 世紀英国の会衆派牧師で讚美歌作家のユースタス・コンダーの作詞の讚美歌で、日本では 1931 年版『讚美歌』からイギリス民謡曲を付して採録されてきた。現代の英語圏讚美歌集では採用されていない。

・21-520「真実に清く生きたい」(= I 452)は、20 世紀初めに早稲田大学で教えていた米国会衆派牧師ウォルターの母親宛に送った手紙の一節が雑誌に投稿された詞に基づく。曲は、メソジスト派の伝道者ピークが作詞者ウォルターに会った際に見せられた歌詞に即興で作曲したものを元に、讚美リーダーとして知られたグラント・タラーが編曲したもの。

・21-522「キリストにはかえられません」(= II 195)は、20 世紀に入ってから作られた後期福音唱歌の一つ。作詞者レア・ミラーについては不詳。作曲は、自由メソジスト教会牧師の家に生まれた音楽伝道者でビリー・グラハムと共に放送伝道や大衆伝道に従事した G・ビヴァリー・シェーの作曲。

21-22「深き悩みより」

Aus Tiefer Not Schrei Ich zu Dir

1. Aus tiefer noth schrei' ich zu dir, / Herr Gott! erhö' mein rufen!
/ Dein gnädig ohr neig her zu mir, / Und meiner bitt' sie öffne: /
Denso du willst das sehen an, / Was sünd' und unrecht ist gethan,
/ Wer kann Herr! für dir bleiben?
2. Bei dir gilt nichts denn gnad' und gunst, / Die sünde zu vergeben; /
Es ist doch unser thun umsonst, / Auch in dem besten leben: / Für
dir niemand sich rühmen kann, / Deß muß dich
fürchtenjedermann, / Und deiner gnaden leben.
3. Darum auf Gott will hoffen ich, / Auf mein verdienst nicht bauen;
/ Auf ihn mein herz soll lassen sich, / Und seiner güte trauen, /
Diemir zusagt sein werthes wort, / Das ist mein trost und treuer
hort, / Deß will ich allzeit harren.
4. Und ob es währt bis in die nacht / Und wieder an den morgen,
/ Doch soll mein herz an Gottes macht / Verzweifeln nicht
nochsorgen. / So thu' l'srael rechter art, / Der aus dem Geist
erzeugetward, / Und seines Gott's erharre.
5. Ob bei uns ist der sünden viel, / Bei Gott ist vielmehr gnaden,
/ Sein' hand zu helfen hat kein ziel, / Wie groß auch sei der
schaden. / Er ist allein der gute hirt, / Der l'srael erlösen wird / Aus
seinensünden allen.

21-520「真実に清く生きたい」

I would Be True

1. I would be true, for there are those who trust me;
I would be pure, for there are those who care;
I would be strong, for there is much to suffer;
I would be brave, for there is much to dare,
I would be brave, for there is much to dare.
2. I would be friend of all— the foe, the friendless;
I would be giving, and forget the gift;
I would be humble, for I know my weakness;
I would look up, and laugh, and love, and lift,
I would look up, and laugh, and love, and lift.
3. I would be prayerful through each busy moment;
I would have faith to keep the path Christ trod.
I would be tuned to hear the slightest whisper;
I would be true, and keep in touch with God,
I would be true, and keep in touch with God.

21-522「キリストにはかえられません」

I'd rather have Jesus

1. I'd rather have Jesus than silver or gold; / I'd rather be His than
have riches untold; / I'd rather have Jesus than houses or lands.
/ I'd rather be led by His nail pierced hand
[Chorus] Than to be the king of a vast domain / Or be held in sin's
dread sway. / I'd rather have Jesus than anything / This world
affords today.
2. I'd rather have Jesus than men's applause; / I'd rather be faithful
to His dear cause; / I'd rather have Jesus than worldwide fame. /
I'd rather be true to His holy name [Chorus]
3. He's fairer than lilies of rarest bloom; / He's sweeter than honey
from out the comb; / He's all that my hungering spirit needs. / I'd
rather have Jesus and let Him lead [Chorus]